

紀伊徳川家の付家老 新宮水野家の御庭焼「三楽園焼」 考古学および自然科学分析からみたその実態

Oniwa-yaki "Sanrakuen-yaki" of the Shingu Mizuno Family,
Chief Retainer to the Kishu Tokugawa Family :
Natural Science and Archaeological Study of Its State

水本和美・新免歳靖・二宮修治

MIZUMOTO Kazumi, SHINMEN Toshiyasu and NINOMIYA Shuji

はじめに

- ①三楽園焼の発見と研究の課題
- ②三楽園焼の出土と「三楽園」の推定地
- ③考古学的所見からみた三楽園焼
- ④三楽園焼磁器の胎土分析
- ⑤三楽園焼の技術と意匠

おわりに

【論文要旨】

本稿は、紀伊徳川家の付家老を勤めた新宮城主水野家の御庭焼「三楽園焼」について、東京都新宿区水野原遺跡の発掘調査において発見された資料をもとに、考古学と自然科学の立場から、その実態の解明を目的とするものである。

三楽園焼は、『南紀徳川史』や現在ボストン美術館に収められているモース・コレクションによって知られていた。紀州藩10代藩主徳川治宝の死後、紀州藩の付家老である水野忠央が江戸藩邸の庭園「三楽園」において紀州藩の御庭焼借楽園焼の交趾焼再興を意図して焼かせたやきものとされる。水野家の市谷原町下屋敷に相当する新宿区水野原遺跡の発掘調査では、「三楽園製」の印銘のある磁器や軟質施釉陶器の製品や未製品、及びその製作に関わる窯と窯道具などが多数出土した。まず、三楽園焼の製品の様相、製作地、製作工程の復元について考古学的手法によって明らかにした。次に、ICP発光分光分析法によって三楽園焼の胎土分析を実施し、三楽園焼胎土の産地推定を行い、復元された製作工程と対比した。さらに、三楽園焼に関連して、紀州藩の諸窯や京焼などとの関係から、三楽園焼の実態を総合的に解釈した。

【キーワード】三楽園焼、新宮城主水野家、水野忠央、紀伊徳川家、御庭焼、水野原遺跡、ICP発光分光分析法